

第6回文学部フォーラム 「ことばと身体」 フォーラム開催にあたって

難波 美和子（熊本県立大学、比較文学）

「文学部フォーラム」は文学部の研究活動を学外の方に知っていただくことを目的に開催されています。これまで文学や言語についてのさまざまな話題を取り上げてきました。今後も多くの方の好奇心にお応えしたいと考えています。今回のテーマは「ことばと身体」です。

近年、コミュニケーションの不全ということが言われますが、その背景として、人間の身体感覚と映像や仮想現実を通して得られる情報とのずれが感覚と言語表現とに不具合を起こしているのではないのか、ということが言われます。けれども、そもそも「脳科学」の方面からは、人間が五官で得た情報というのは、皮膚の感覚や体内のことも含めて、脳の中で処理されて始めて知覚できるとされているようです。そうした知覚を私たちは言葉にすることによって理解しているのではないのでしょうか。そこで、私たちの物事の認識のしかたとそれを言葉で表現することの間には、どんな問題があるのか、考えてはどうかと考えました。「ことばと身体」というテーマはさまざまな方面からアプローチすることができます。議論の可能性を探るということも今回のフォーラムの目的です。



人間の想像力は、文学テキストという文字を介した言語表現によって、可能性を拡げてきました。文学は自由な表現の場であり、多種多様な世界認識の可能性を突

き詰めることができる場でもあります。文学とは社会の様々な条件に支配されつつ、規範を打ち破るものでもあるのです。しかし文学という想像力の表現において、人間の物質的な身体、つまり肉体はどこにあるのでしょうか。それを問わなければならないのは、文学において、身体的な主体がそれほど自明なものではないからです。ことばは、世界を分節化することによって、「しるしづけられたもの」を疎外し、「名づけられないもの」を排除すると考えられます。身体的な感覚や経験は、しばしば思考と対比され、「語りえないもの」として疎外されてはいないのでしょうか。だとするならば、文学は身体をどれほど表現しえているのでしょうか。そして「しるしづけられていない」「自明の」身体とはどのような身体なのでしょうか。

フォーラムは2部構成をとりました。第1部は竹村和子氏の講演「ことばと身体一性的差異をめぐって」です。人間とは過剰な意味の中で、言葉によって世界を認知する存在であることが論じられました。身体とはすでにつねにことばによって把握せざるをえないものなののでしょうか。人間は自己と自己の身体を、社会という鏡をとおして、誤解によって認識し、性別という社会的身体を獲得するのです。そして精神分析学の理論の発展史が、女性の権利獲得運動の展開との相互関係にあるという図式はたいへん興味深いものでした。竹村氏のご了解により、講演をもとにした論文をここに収録させていただきました。

第2部は講師3名からの論題提示と、竹村氏も加わったの討論が行われました。論題の概要も収録しましたのでご覧下さい。その後の討論において、中国文化圏では、男女の区別が明確な一方で、近代に至るまで、男性性と女性性に身体上の区別以上の意味を余り与えないが、近代のヨーロッパ文化圏では男性性・女性性への過剰な意味が付与されるという点での意見の交換がありました。また、メイ・ウェストの表象をめぐって、女性性を模倣する女装芸人を模倣する女優、さらに女優や歌手、女装芸人が彼女を模倣するというパフォーマンスの連鎖に話題が及び、白人がイメージする黒人性を模倣して黒人を演ずる黒人という記号の連鎖へも議論は広がりました。

議論すべき範囲は広く、講師諸氏も語りきれない部分がありましたが、会場のみなさんからの質問もいただき、人間の身体がもつ意味の連鎖という問題を提起する機会にはなったと考えています。わたしたちが「身体」というとき、それは何よりもまず、意味としてたち現れてくるということです。その意味は、所与の、自明のものではなく、演技を含めた行為によって始めて形を与えられ、見えてくるものなのでしょう。